

前橋市立図書館コレクション展

2026 前期

会期 令和8年4月28日(火)～7月12日(日)

会場 図書館本館 2階展示室

前橋市立図書館

(群馬県前橋市大手町二丁目12-9 / 027-224-4311)

第1章 前橋の鉄道

| 作品リスト No.1-7 |

1. 高崎線（現在 大宮—高崎間 74.4km）

日本初の私鉄である日本鉄道会社^{※1}が最初に開業した路線が、現在の JR 高崎線です。

明治 5 (1872)年に初めて鉄道を開通させた政府は、次第に資金難により官主導の鉄道敷設が困難となっていたため、民間資本を取り入れる方針に転換します。そこでまず設立されたのが日本鉄道会社であり、明治 16(1883)年 7 月 28 日に上野—熊谷間を開業させました。その後、熊谷—本庄、さらに本庄—新町（現・高崎市）間が開通し、これによって群馬県にも初めて鉄道が通ると、翌年の 5 月 1 日には新町—高崎間が開通して、東京と高崎が直通。8 月 20 日には高崎と前橋がつながり、ここに上野—前橋間の鉄道が完成しました。ただし、当時の前橋駅は現在地（表町二丁目）ではなく、内藤分村（現・石倉町一丁目）に置かれたため、今日では「内藤分停車場」と呼ばれています。全国的に見ても早く群馬県内に鉄道が敷設された理由のひとつには、当時の花形産業である蚕糸業との関わりが挙げられます。特に前橋の生糸は、横浜開港以来外国で高い評価を受けていたこともあり、輸出を効率的に行うためにも鉄道の敷設が必要であると考えられていたのです。

なお、高崎線は当初前橋までではなく、高崎止まりで想定されていました。しかし、のちに初代市長となる下村善太郎ら前橋の有力商人が日本鉄道会社の多額の株式を引き受けて鉄道を前橋まで延伸するよう運動を行ったことで、内藤分までつながることになりました。

高崎線は昭和 27(1952)年に電化され、昭和 61(1987)年の日本国有鉄道の分割民営化に伴って JR 東日本の管轄となりました。平成 13(2001)年の湘南新宿ライン、平成 27(2015)年の上野東京ライン運行開始により、現在東海道線との直通運転が行われています。

※1 日本鉄道会社：明治 14(1881)年創立。日本で最初の民間の鉄道会社。東京と東北を結ぶ鉄道の敷設を目的として、華族や士族らが中心となって設立された。東京—高崎間の鉄道を第一着手路線とし、明治 17(1884)年に開業。設立の目的であった東京—青森間は明治 24(1891)年 9 月に実現した。現在の東北本線や高崎線などを営業。明治 39(1906)年の鉄道国有法により国有化され、昭和 62(1987)年の日本国有鉄道の分割民営化により JR 東日本となる。

●内藤分停車場（旧前橋駅）

明治 17(1884)年 8 月 20 日、上野—前橋間の鉄道開通に伴い設置された駅。当時、利根川に鉄橋を架ける工事が困難であったため、前橋の中心部ではなく、利根川をはさんだ対岸の西群馬郡内藤分村（旧元総社村、現・石倉町一丁目）に駅が開設されました。この駅と前橋の中心部とを結ぶため

の架橋工事により、明治 18(1885)年に木鉄を混合させた橋（利根橋）が完成。現在、内藤分駐車場の跡地には記念碑が建設されています。

2. 両毛線（現在 小山一新前橋間 84.4km）

現在の JR 両毛線は、両毛鉄道会社※²により敷設されました。

日本鉄道会社は、明治 17(1884)年に上野—前橋間を全通させたのち、明治 18(1885)年 7 月 16 日には大宮—宇都宮間を開通させるなど、現在の JR 東北本線にあたる鉄道の建設に着手していました。この日本鉄道会社線の沿線から外れてしまった伊勢崎・桐生・足利・佐野などの養蚕・製糸・織物業が盛んな地域の有志が中心となって、小山—前橋間に鉄道を建設して産業振興に寄与することを目的に、両毛鉄道会社は設立されます。明治 21(1888)年 5 月にまず小山—足利間が開通し、その後足利—桐生間、明治 22(1889)年 11 月 20 日に桐生—前橋間が開通したことにより両毛線は全通しました。この時に設置された前橋駅が、現在地の前橋駅です。

昭和 32(1957)年に高崎—新前橋間が上越線に編入されたため、現在の両毛線は小山—新前橋間ですが、実際には新前橋駅から上越線に乗り入れて高崎駅まで直通しています。昭和 43(1968)年には全線電化され、昭和 62(1987)年の日本国有鉄道の分割民営化により JR 東日本の管轄となりました。

※² 両毛鉄道会社：明治 19(1886)年創立。両毛地方（群馬県・栃木県）の機業地の有志が中心となり設立された。初代社長は経済学者兼政治家の田口卯吉。明治 30(1897)年に日本鉄道会社を買収合併され、明治 39(1906)年の鉄道国有法によって国有化された。

●前橋停車場（前橋駅）

明治 22(1889)年 11 月に小山—前橋間の鉄道が開通したことにより、両毛鉄道会社によって設置された駅。

現在の前橋駅の位置（旧・上川淵村前代田。現・表町二丁目）に建設されたため、日本鉄道会社の前橋駅（内藤分停車場）とは距離があり、日本鉄道会社と両毛鉄道会社の路線は接続していませんでした。この問題を解決するため、両毛鉄道会社は利根川の架橋工事に着手し、小山—前橋間が開通した年の 12 月 20 日に鉄橋が竣工。これによって両社の路線は連結されて、同 26 日には列車が開通し、前橋の中心部から高崎を經由して直接東京方面に向かうことが可能になりました。また、この鉄橋の完成によって内藤分停車場は廃止され、駅の機能はこちらに集約されることになりました。

なお、利根川鉄橋と明治 18(1885)年完成の利根橋とは並んで架けられたため、「利根の双橋」として前橋名所のひとつになっていたといえます。

駅舎は明治 35(1902)年と昭和 2(1927)年に改築が行われ、昭和 61(1987)年には路線の高架化に伴い再び改築されています。

3. 路面電車（通称チンチン電車）

昭和 29(1954)年まで、前橋市内には現在の国道 17 号に沿って路面電車が走行していました。その歴史は、馬車鉄道^{※3}から始まっています。

明治 23(1890)年 7 月 14 日、上毛馬車鉄道は前橋―渋川間のおよそ 15km を結ぶ馬車鉄道を開業しました。群馬県内の馬車鉄道としては明治 21(1888)年開業の碓氷馬車鉄道（横川―軽井沢間）に次ぐ二番目のものでした。当初は岩神村細ヶ沢（現・住吉町一丁目）と北橋村（現・渋川市）とを結んでいましたが、次第に延長されて前橋駅―渋川新町間の運行になります。のちに社名を「前橋馬車鉄道会社」と改めて営業を続けていましたが、明治 42(1909)年に利根発電株式会社^{※4}が設立されると、馬車から電車への移行が計画されました。翌年には社名を「前橋電気軌道株式会社」と改称した上で、10 月 9 日、一府十四県連合共進会^{※5}の会期中に電車による営業が実現します。大正時代に会社は発電会社に合併され、昭和 2(1927)年には東武鉄道株式会社に吸収されました。以後この路線は前橋線と呼ばれ、高崎―渋川間（高崎線）、渋川―伊香保間（伊香保線）の路面電車と総称して「伊香保軌道線」として運行されていました。

この路線は、創業時から四万・草津・伊香保方面の観光客の移動手段などとして利用されていましたが、次第に経営が悪化して戦前に一度廃止が決定されていました。戦中戦後には人や貨物の輸送手段として重宝されたものの、道路の整備やバスなどの交通手段の充実とともに利用は再び減少し、昭和 29(1954)年 2 月 28 日をもって路面電車は前橋から姿を消しました。

※3 馬車鉄道：路面上をそのまま馬が走る通常の馬車と異なり、路面に設置されたレールの上を馬が走行する馬車のこと。電車と同様、時刻表にもとづき停留所を設け、区間ごとに運賃が定められた。日本で最初の馬車鉄道は明治 15(1882)年に新橋―日本橋間で開業した東京馬車鉄道。

※4 利根発電株式会社：明治 43(1910)年 9 月送電開始。前橋・渋川・伊勢崎・太田・館林などに電気を供給したが、のちに事業を拡大して供給区域が群馬・栃木・埼玉にまたがった。大正 10(1921)年、現在の東京電力の前身である東京電燈株式会社に合併された。

※5 一府十四県連合共進会：明治 43(1910)年 9 月 17 日から 11 月 15 日にかけて、群馬県主催で前橋市を会場として開催された共進会。共進会とは産業振興を目的として産物や製品を展覧し、優劣を品評するイベントで、現在の博覧会にあたる。この時の共進会には群馬県のほか関東甲信越と東北地方の府県が参加し、出品数は 7 万点、入場者数は県内外から 110 万人に及んだ。前橋の馬車鉄道はこの共進会をきっかけに電車化へと向かった。

4. 上越線（現在 高崎―宮内間 162.6km、越後湯沢―ガーラ湯沢間 1.8km）

現在の JR 上越線は、昭和 6 (1931)年 9 月 1 日に全線開通するまでにかかなりの年月を必要とした困難の多い鉄道でした。

初めて上越線の計画がなされたのは明治 12(1879)年で、この時前橋の高橋周禎^{しゅうてい}※6らによって東京―新潟間の直結を目的とする上越鉄道会社が設立されました。明治 33(1900)年には敷設免許がおりましたが、資金難などが影響したため実現には至りませんでした。その後も各方面で上越線開通に向けた運動が続けられていましたが、大正 7 (1918)年、官営鉄道として上越線を建設する計画が帝国議会を通過し、ここで初めて上越線の敷設が現実のものになりました。工事は群馬・新潟の両側から始められ、上越南線と称される群馬側は大正 10(1921)年 7 月 1 日に高崎―渋川間が最初に開通、昭和 3 (1928)年 10 月には水上（現・利根郡みなかみ町）にまで到達しました。一方、新潟側は大正 14(1925)年に宮内―越後湯沢間が開通しています。昭和 4 (1929)年には難工事であった清水トンネルが完成したことで水上と越後湯沢が結ばれ、同 6 (1931)年 9 月、高崎―宮内間が全通して上越線は成立しました。これにより、東京―新潟間は従来の信越本線^{※7}と比較して約 98km、時間にして約 4 時間短縮されることになりました。

ところで、大正 7 (1918) 年に帝国議会に提出された上越線の当初の敷設案は、高崎から渋川に直行するもので前橋を通過していませんでした。これを知った市の関係者らによる帝国議会議員らへの熱心な働きかけが成就して、上越線は前橋付近を経由することになります。大正 10(1921)年の高崎―渋川間開通に伴い、現市内には新前橋駅（現・古市町）と群馬総社駅（総社町植野）が設置されました。

電化は昭和 22(1947)年、全線複線化は昭和 42(1967)年に実現。昭和 62(1987)年の日本国有鉄道の分割民営化により JR 東日本の管轄となりました。

※6 高橋周禎：弘化 3 (1846)年～大正 5 (1916)年。新田郡大館村（旧尾島町、現・太田市）生まれの医師。漢学と医学を修め、群馬県人として初めて種痘免許を受けた。前橋市内に医院を開業するとともに、『近世上毛偉人伝』等の著作を出版した。

※7 信越本線：高崎―横川間、篠ノ井―長野間、直江津―新潟間の 3 線からなる JR 東日本の鉄道。高崎―直江津間は明治 26(1893)年全通、直江津―新潟間は北越鉄道によって明治 37(1904)年に全通し同 39(1907)年には国有化されたことで、高崎―新潟間が直通した。平成 9 (1997)年の北陸新幹線開業などにより、一部の区間で廃止や移管が行われ現在に至る。

5. 上毛電気鉄道

上毛電気鉄道は大正 15(1926)年に設立され、昭和 3(1928)年 11 月 10 日に中央前橋―西桐生間 25.4km を開業しました。

この鉄道は地元の電力会社・織物業者・地主らが中心となって、交通事情の改善や養蚕をはじめとする産業の振興を目的として敷設が計画され、大正 13(1924)年には、前橋―大胡―桐生間、大胡―伊勢崎―本庄間の敷設免許を取得しました。第一次世界大戦後の不況により地元資本だけでは弱く、群馬県にゆかりのある実業家・大川平三郎^{※8}らに援助を求め、大川は初代社長に就任しました。その後、前述のとおり前橋―大胡―桐生間は昭和 3(1928)年に実現しましたが、大胡―伊勢崎―本庄間は資金難が深刻で、着工はしたものの昭和 9(1934)年に未完成のまま免許を失効してしまいました。

なお、上毛電気鉄道では当初、前橋―大胡―桐生間と大胡―伊勢崎―本庄間のほかに、本庄―藤岡―吉井間、新町―藤岡―鬼石間、東三俣―群馬総社駅間などの鉄道敷設免許も出願していましたが、これらはいずれも却下されています。

今年、上毛電気鉄道は設立から 100 年を迎え、1 月には交通系 IC カード利用の可能化や前橋を舞台としたアニメ「前橋ウィッチーズ」とコラボした車内放送が取り入れられるなど、新たな試みが行われています。

※8 大川平三郎：万延元(1860)年～昭和 11(1936)年。武蔵国川越藩の藩士の家に生まれ、その後藩主の転封に伴って前橋に移住。叔父の渋沢栄一を頼って上京し学問を修め、明治 8(1875)年に抄紙会社（のちの王子製紙）に入社。以後「製紙王」と呼ばれるほど業界で活躍しながら、それ以外の多くの事業にも携わった。群馬県では 6 社の経営に参画し、上毛電気鉄道はそのうちの一つ。

第2章 江戸と明治の料理書

この章では、江戸時代と明治時代に出版された料理書に注目します。江戸時代の庶民の食事は、一汁三菜が基本のシンプルなものでした。18世紀後半になると料理屋が出現して外食文化が生まれ、料理書の出版も増加し、庶民たちも食文化を楽しむようになります。時代が下って明治時代になると、西洋料理が伝来してきます。日本風アレンジされた西洋料理は洋食と呼ばれるようになり、次第に一般家庭にも取り入れられるようになりました。時代が進むにつれて変化してきた食卓の様子を、料理本を通じてぜひお楽しみください。

1. 江戸時代の料理書

| 作品リスト No.8-11 |

【漬物早指南】

天保7(1836)年に記された漬物の専門書で、『四季漬物塩嘉言』とも呼ばれます。著者は江戸の漬物問屋である小田原屋の主人で、64種の漬物について、野菜の選び方や塩の分量など具体的なレシピが紹介されています。沢庵漬けなど、現在でもよく食べられている品目についてもいくつかが掲載されており、中でも梅干しやみそ漬けは現在とほとんど変わらない作り方をしていたことがうかがえます。

【古今名物御前菓子秘伝抄】

享保3(1718)年に刊行された菓子の製法書で、日本で最初に刊行されたお菓子のレシピ本と言われています。掲載されているレシピは105種類で、ちまきなど日本で古くから食べられてきたと考えられているもののほか、カステラや金平糖、パンなど南蛮から伝来したものの製法も多く見られます。また、本書以外に製法の掲載がなく、味や見た目が不明の菓子もあるようです。

展示している東洋文庫には、本文及び現代語訳のほかに、注釈としてそれぞれの菓子についての様々な情報が付されています。

【料理物語】

寛永20(1643)年に刊行された、江戸時代前期の代表的な料理書で、著者は不明です。これ以前の料理書は、公家や武家に仕えた料理人による魚のさばき方や服装、宮中での料理作法など、有職故実について記載されたものでした。しかし、本書は包丁流派にこだわらず、宮中以外の人々の日常において食されてきたと考えられる食材や料理を紹介した画期的な書物で、以後の料理書に大きな影響を与えました。

内容は、第1の海の魚から第7の青物の部で食品名と主な料理法を列挙しており、第8のなまだれだし、いりぎけの部から第19の茶の部で煮物や焼き物、菓子など代表的な料理の作り方を解説しています。また、第20の万聞書の部では「狸汁」や「正木醤油」など、当時食されていたと考えられる様々な料理や調味料の作り方が紹介されています。跋文には、書名の由来として、古くから物語として聞き伝えられてきた事柄をまとめたことから料理物語と名付けたということが記されています。

【本朝食鑑】

元禄8(1695)年に、漢文で刊行された食物本草書です。著者は江戸時代前期の医師である人見必^{ひとみひつ}大^{だい}で、原本は全12巻10冊あります。

内容は、国産の食品442種についての効能や食べ方、毒の有無などを医学的な視点から解説しており、分類の仕方は『本草綱目』^{※9}に則っています。それぞれの食品の解説内容は、『本草綱目』にとらわれずに著者自身が調査し、自身の体験に基づいた記述がされている項目も多くあります。また、地域による食材の味の変化やその食材に関することわざ、民間行事などにも言及しており、博物学的な記述も見られます。従来の本草書は主に薬物になる品目について紹介していましたが、本書は日常的に口にする食品についての解説が多く、12巻中8巻を魚介類や獣類などの動物性食品が占めている点も特徴のひとつです。

※9 『本草綱目』: 1596(慶長元)年に明で刊行された本草書。

2. 明治時代の料理書

| 作品リスト No.12-13 |

【家庭応用洋食五百種】

明治40(1907)年に出版された料理書で、509種の洋食について、家庭で作れるようにレシピを紹介しています。赤堀峯吉(三代目)・吉松・菊子の3人による合著です。赤堀峯吉(三代目)はパリの大使館で料理人として勤務していたことがあり、吉松は明治天皇及び大正天皇の時代に宮内庁の大前職を務めていました。また、菊子は明治時代にはまだ珍しかった女性シェフで、日本女子大学と東京師範学校で教員も務めており、3名とも異なる場で料理に深く関わっていた人物です。赤堀家の初代赤堀峯吉は、明治15(1882)年に日本初の料理学校「赤堀割烹教場」を創立した人物で、日本女子大学の発足メンバーの一人でもあり、生涯をかけて女性教育に尽力しました。

【四季毎日三食料理法】

明治 42(1909)年に作られた、365 日、1 日 3 食分の献立表と調理法が掲載された資料で、春夏秋冬の 4 巻に分かれています。一般の家庭で参考にできるような献立表が掲載されており、さらにそれぞれの料理の調理法が詳しく説明されています。献立に採用されている料理は、初物よりは廉価で手に入れやすい季節物を選ぶこと、なるべく簡単な方法で作れること、消化しやすいことなど、様々な点に留意されて選ばれています。また、冒頭には献立の留意点と併せて、調理用具や野菜の切り方の解説絵、だしの作り方、調味料の塩梅加減など、料理をする際に役立つ情報が掲載されています。

著者の安西古満子は、赤堀割烹教場の創業者である赤堀峯吉らが創立した「治庖会」という組織の教場主事を務めていたことがあり、明治時代の女性教育に従事していた人物です。

【増補注釈食道楽】

明治 36(1903)年に、報知新聞にて連載されていた料理小説です。連載中から評判が良かったため単行本として出版され、明治・大正時代のベストセラーとなりました。春夏秋冬の 4 巻と続編 4 巻で構成されており、登場人物の会話形式でレシピや食品の質の見分け方などが紹介されています。紹介されている料理数は、和洋中問わず約 600 食に及びます。

また、それぞれの巻末に付録として食品分析表や調理器具の金額など、様々な情報が記されています。現在でも使われている日本食品標準成分表が制定されたのは 1950(昭和 25)年なので、明治時代当時にはとても画期的な付録だったと思われます。

第3章 文豪たちの本のかたち

本の表紙や見返し、扉などの体裁を作ること、デザインすることを装丁といいます。現在では装丁のことをブックデザインとも呼び、ブックデザイナーや装丁家と呼ばれる専門の人が担当しています。

明治から大正、昭和初期にかけての名著と呼ばれる本には、装丁を有名な画家が手がけたものも多く、凝った絵や文字で彩られた美しいデザインが多く見られます。西洋から印刷や製本技術がもたらされた明治期には和装書から洋装本へと形を変えていき、橋口五葉や小村雪岱などが文豪の装丁を手がけるようになると一気に日本の装丁文化が花開きます。また、大正から昭和にかけて、本が庶民にも身近になり、出版社も趣向を凝らした書籍を多く出版するようになりました。

1. 夏目漱石

| 作品リスト No.15-20 |

『吾輩は猫である』は夏目漱石が明治38(1905)年に句誌『ホトトギス』に発表し、連載中から文壇で高く評価された作品です。中学教師の苦沙弥先生に拾われた主人公の「吾輩」が、飼い猫の目線で人間社会を風刺的に描いています。当初短編として着手されましたが、読者から圧倒的な支持を得たため続編の執筆につながりました。その後、『坊っちゃん』、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」の一節が有名な『草枕』、『三四郎』、『それから』、『門』、『こゝろ』などの作品を次々に発表し、『明暗』の連載途中で亡くなります。

漱石は『吾輩は猫である』の単行本化が決まった際、表紙などの装丁を橋口五葉、挿絵を浅井忠と中村不折に依頼します。橋口五葉の意匠の特徴は、西洋のアール・ヌーヴォーと日本の伝統的な図案をうまく融合させているところにあるといわれており、この『吾輩は猫である』はモダンで風刺がきいた品格あるデザインです。ヨーロッパに留学経験があり、美術に対する意識が高い漱石は五葉らの絵を高く評価しています。

初版は菊判^{※10}、上製^{※11}、角背^{※12}、天金^{※13}、アンカット^{※14}、カバー付という当時としては画期的なものでした。表紙カバーを外すと、その下には白の堅厚紙に金箔押しのタイトルと朱色の猫の絵柄が施されています。細部へのこだわりが随所に見られ、これまでにない近代的な美しい装丁で、発売されると大きな話題を呼びました。

漱石は序文で「自分の書いたものが自分の思ふ様な体裁で世の中へ出るのは、内容の価値如何に関らず、自分丈は嬉しい感じがする。自分に対しては此事実が出版を促がすに充分な動機である」と記しています。

『鶉籠』^{うずらかご}『虞美人草』『草合』、前期三部作の『三四郎』『それから』『門』、後期の作品の『彼岸過迄』『行人』など、漱石の多くの作品の装丁を五葉が手がけ、晩年期の作品は画家の津田青楓^{せいふう}が担当しました。『こゝろ』の装丁は漱石自らが考案し、描いた一冊です。

※10 菊判：A5版より少し大きなサイズ、縦22cm、横15cm。

※11 上製：製本様式の一つ。ハードカバー。

※12 角背：書籍の背の部分が平らで表紙の平部分に対して直行している製本様式のもの。

※13 天金：書籍の上の切り口に金箔をつけること。

※14 アンカット：小口側が無裁断で、袋状になった状態からペーパーナイフで切りながら読み進めるヨーロッパスタイル。

2. 北原白秋

| 作品リスト No.21-22 |

福岡県の柳川市生まれ。明治39(1906)年に与謝野鉄幹の誘いで『明星』に詩歌を発表し、その後「パンの会」を創設して耽美主義文学運動を起こします。処女詩集『邪宗門』は異国情緒にあふれた120篇の詩が収められており、この詩集は近代象徴詩の金字塔と言われています。装丁は石井柏亭^{はくてい}によるもので、表紙の右半分は赤のクロスに南蛮寺鐘の紋章が金で押され、左半分は薄緑色で蝮、ジャコウネコ、毒草、香木などが描かれた妖しさの漂う絵柄、挿絵は山本鼎^{かなえ}の木版画が用いられています。一時代を飛躍した内容と豪華な装丁で注目を集め、室生犀星ら多くの詩人に影響を与えました。

明治44(1911)年に発表した第二詩集『おもひで』は、故郷柳川の風物を背景に、幼年時代の感情をうたった190編が収録され、序文の「わが生ひたち」とともに高く評価されました。この詩集の出版記念会は日本で最初に開催された出版記念会とされており、その席上で上田敏は「日本古来の歌謡の伝統と新様の仏蘭西芸術に亘る総合的詩集である」、さらには「序文の「わが生ひたち」を読んで落涙した」、と述べて絶賛したといわれています。

『おもひで』は東雲堂書店から出版され、三五版と呼ばれる手のひらサイズで、装丁・挿絵ともに白秋が手がけています。白秋の独特の感覚が内容や装丁にも表れている詩集です。

3. 坪内逍遙

| 作品リスト No.23 |

作家、劇作家、評論家。東京帝国大学（現在の東京大学）でヨーロッパの文学を研究し、文学理論書『小説神髓』を執筆。既成観念にとらわれず、人情をありのままに描くべきだとする写実主義を唱えました。同時にこの理論を小説にした『当世書生気質』を発表し、文学界に衝撃を与えると

ともに、日本の近代文学の先駆者となりました。二葉亭四迷とともに日本近代小説の生みの親とも称されます。『しがらみ草紙』による森鷗外との現実主義と理想主義で対立した「没理想論争」は、近代最初の本格的な文学論争としても有名です。また、演劇改良にも力を注ぎ、史劇『桐一葉』などを発表したほか、晩年はシェイクスピアの研究にも尽力しました。

『当世書生気質』は、春のやおぼろの著者名で明治18(1885)年6月から翌年1月にかけて発行された小説です。全17冊で、書名の上に「一読三歎」^{※15}の角書^{つのがき}^{※16}が付され、挿絵は歌川国峰、長原止水、武内桂舟らが担当しました。逍遙は挿絵にもこだわっており、国峰の挿絵が古風すぎるといって挿絵を描きたいと申し出た長原止水に対し、自ら描いた下絵を送って細かく指示をしたといわれています。しかし当時は浮世絵風の挿絵が一般的だったため、止水の洋画風の絵は新しすぎて読者に受け入れられず、2回で終了し浮世絵風の絵に戻る事となりました。

※15 「一読三嘆」：(一度読んで何度も感嘆する意から)すばらしい詩文などを読んで非常に感銘をうけること、またそのような詩文や本のこと。

※16 角書：書物の題名などの上に主題や内容を示す文字を二行に割って記したもの。

参考文献

- 『前橋市小史』 前橋市役所秘書課／編集発行 1954年
- 『群馬県史 明治時代 第2分冊 経済・産業篇』 萩原進／著 高城書店出版部 1959年
- 『明治あれこれ』 萩原進／編 みやま文庫 1963年
- 『東武鉄道65年史』 東武鉄道年史編纂事務局／編 東武鉄道 1964年
- 『明治文学全集 第16巻 坪内逍遙集』 筑摩書房 1969年
- 『日本近代文学大系 第28巻 北原白秋集』 角川書店 1970年
- 『群馬県百年史 下巻』 群馬県／編集発行 1971年
- 『粕川村誌』 粕川村誌編纂委員会／編 群馬県勢多郡粕川村役場 1972年
- 『群馬県史(六)』 群馬県教育会／編 歴史図書社 1972年
- 『勢多郡誌 復刻版』 勢多郡誌編纂委員会／編 群馬県文化事業振興会 1973年
- 『日本近代文学大系 第3巻 坪内逍遙集』 角川書店 1974年
- 島田幸一「群馬県鉄道布設序説」『群馬県史研究 第3号』 群馬県史編さん委員会事務局 1976年
- 『上州事始め』 萩原進ほか／編 みやま文庫 1976年
- 『日本国語大辞典』 日本大辞典刊行会／編 小学館 1976年
- 『写真で見る東武鉄道80年』 東武鉄道 1977年
- 『前橋市史 第4巻』 前橋市史編さん委員会／編 前橋市 1978年
- 『駅』 読売新聞社前橋支局／編 煥乎堂 1979年
- 『群馬県百科事典』 上毛新聞社 1979年
- 『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 前橋』 丸山知良・島田幸一／編著 国書刊行会 1979年
- 『伊香保電車盛衰 レイルNo.10』 エリエイ出版部 1983年
- 島田幸一「前橋駅の誕生そのうらおもて」『群馬歴史散歩 第63号』 群馬歴史散歩の会 1984年
- 『ふるさと石倉』 石倉史蹟愛好会／編集発行 1984年
- 『前橋市史 第5巻』 前橋市史編さん委員会／編 前橋市 1984年
- 『新潮日本文学アルバム 25 北原白秋』 新潮社 1986年
- 『群馬県史 資料編24』 群馬県史編さん委員会／編 群馬県 1986年
- 『両毛鉄道会社の研究』 石井常雄／編集発行 1987年
- 『角川日本地名大辞典 10 群馬県』 「角川日本地名大辞典」編纂委員会／編 角川書店 1988年
- 『群馬県史 通史編8』 群馬県史編さん委員会／編 群馬県 1989年
- 『両毛を結んで』 前橋駅100年のあゆみ編さん委員会／編 上毛新聞社 1989年
- 『わた史の前橋駅百年』 平田一夫／編集発行 1989年
- 『国史大辞典』 国史大辞典編集委員会／編 吉川弘文館 1991年
- 『写真集 前橋』 前橋市役所企画部広報課／編 前橋市 1992年
- 『日本大百科全書』 小学館 1994年
- 石井常雄「前橋馬車鉄道会社の経営史研究」『明大商学叢書 第78巻第4号』 明治大学商学研究所 1996年

- 『渋川のチンチン電車の歴史』 渋川市教育委員会／編集発行 1997年
- 『上越線の80年』 郷土出版社 1997年
- 『前橋史帖』 中島明／著 みやま文庫 1997年
- 『思い出のチンチン電車伊香保軌道線』 狩野信利ほか／編 あかぎ出版 1998年
- 『日本の名随筆 別巻87』 松山猛／編 作品社 1998年
- 『大きな活字の新明解四字熟語辞典』 三省堂 1998年
- 『RAILWAY 100』 東武鉄道社史編纂室／編 東武鉄道 1998年
- 原田雅純・手島仁「群馬県における鉄道建設の計画とその意義」『群馬県立歴史博物館紀要 第25号』
群馬県立歴史博物館 2004年
- 『群馬の鉄道 一上信電鉄・上毛電鉄・わたらせ渓谷鐵道のあゆみ一』 群馬県立歴史博物館／編集発行 2004年
- 『群馬の鉄道』 あかぎ出版／編集発行 2006年
- 『目で見る前橋の100年』 南雲栄治・柳井久雄／監修 郷土出版社 2006年
- 『世界大百科事典』 平凡社 2007年
- 『IKAHODENSHA』 田部井康修／著 東武博物館 2008年
- 『群馬新百科事典』 上毛新聞社 2008年
- 『文豪の装丁』 NHK「美の壺」制作班／編 日本放送出版協会 2008年
- 『版画芸術 No.152』 阿部出版 2011年
- 『写真アルバム 前橋市の昭和』 いき出版 2012年
- 『ぐんまの鉄道』 原田雅純／著 みやま文庫 2015年
- 『写真集 前橋駅』 阿部勇一／撮影 上毛新聞社事業局出版部 2015年
- 『橋口五葉：装飾への情熱』 西山純子／著 東京美術 2015年
- 『画家のブックデザイン』 小林真理／著 誠文堂新光社 2018年
- 『日本のブックデザイナー一五〇年：装丁とその時代：別冊太陽スペシャル』 平凡社 2023年

ウェブページ

- 『140年の歴史 - 赤堀料理学園』
<https://cook.co.jp/140%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2-2/>
- 『『古今名物御前菓子秘伝抄』享保3年(1718)|和菓子だより』
<https://www.toraya-group.co.jp/corporate/bunko/activity/bunko-activity-collection18-08-24>